

白居易飲酒詩考

——陶淵明と比較して——

埋田重夫

〔一〕序

白居易は生老病死を見詰める詩人である。詩歌に日々の哀歎を日記の如く綴り続け、死の前年となる七十四歳（會昌五年）には、唐代随一とも言うべき七十五卷三八四〇首からなる大集を完成させている。今日までに四卷が佚亡したものの、作品全體の保存率は九割九分に達しており、現代の我々は一二〇〇年前の中國を生きた文人の生涯と日常を、まるで手に取るように理解することができるのである。これもまた白居易の詩文を愛讀する者の僥倖であるう。

そのように豊饒な白居易文學を考える時、彼が如何なる對象を重點的かつ持續的に詠じているのかという視點は、

ほとんど缺かすことのできないものとなっている。こうしたいわゆる「題材」について、部分的な「素材」から全體的な「主題」まで當該作品における表現對象の全てを含む總合概念として捉える時、白詩にとってそれらは一體どのようなものとして存在しているのであろうか。彼が一生に制作した膨大な作品の中から今回の論考では特に飲酒詩を取り上げ、主に陶淵明と比較しながら作家と詩材と心象の應答關係について考察を加えてみたい。陶淵明が白居易の文學（詩歌）の師であったという事實は、兩者の飲酒詩を分析する前提として特に留意されなければならないであろう。

結論から言えば白居易にとつて飲酒詩は、『白氏文集』全體にあつて主要なないし代表的な題材となっている。作者

の作風をよりよく表すもの、詩人の作品群において不可欠性が高いこと、享受史にあつて著名であり影響力が大きいこと、以上三點の何れを鑑みても白居易の飲酒詩^①が、その文學を支える大きな要素になっていることは否定できないであろう。彼になる詩歌の精髓はほぼ間違いなくこれらの作品にも内在している。陶淵明の田園と飲酒、李白の羈旅と飲酒、白居易の閑適と飲酒などの如く、複数の題材を相互に繋ぐ關係性に着目していくことは、中國古典詩を味讀鑑賞する際の有力な方法論として、今後さらに重視されようと思われる。

(二) 飲酒詩の始原

概して酒は神靈 (spirit) との交感交流という宗教儀禮と共に發生し、後世ではまた詩人の詩想や詩興を深める上で大きな役割を果たしてきた。中華文明において酒の醸造の歴史は大變古く、それがまた文學の領域で豊かな葉脈を形成している。人口に膾炙する魏武帝曹操「短歌行」の「對酒當歌、人生幾何。譬如朝露、去日苦多。……」(酒に對へば當に歌ふべし。人生まれて幾何ぞ。譬へば朝露の如し、去りし日は苦だ多し。……)を初めとして、中國歴代の文學者達

は夥しい飲酒詩を制作してきた。その長い傳統にあつて東晉の陶淵明、初唐の王無功、盛唐の李太白、中唐の白樂天は、中國文學の「四大飲酒詩人」として特筆される。陶潛が初めて本格的に開拓した飲酒詩の系譜は、獨自の作風を持つ王績へと受け繼がれ、續く李白によって一氣に開花し、さらに白居易の登場を待つてその世界を一層充實させたと言つてよい。

中國文學史において飲酒を最初に詠うものは、遠く先秦の『詩經』にまで遡ることができ^②る。確認できた作例を分類整理して詩題を掲げれば以下のようになる。

- [A] 國風(周南「卷耳」邶風「柏舟」「簡兮」「泉水」王風「黍離」鄭風「叔于田」「女曰鷄鳴」唐風「山有樞」秦風「晨風」爾風「七月」。
- [B] 小雅(鹿鳴)「常棣」「伐木」「魚麗」「南有嘉魚」「六月」「吉日」「斯干」「小宛」「大東」「北山」「楚茨」「信南山」「桑扈」「頌弁」「車輦」「賓之初筵」「魚藻」「角弓」「瓠葉」。
- [C] 大雅(「行葦」「既醉」「鳧鷖」「蕩」「抑」「韓奕」)。
- [D] 頌(周頌「執競」「豐年」「載芣」「絲衣」魯頌「有駟」「泮水」)。

何かしら酒に言及する詩は國風十篇・小雅二十篇・大雅六篇・頌六篇の多きに達しており、また小雅の「賓之初筵」と大雅の「既醉」が飲酒そのものを詩題にしていることも留意されよう。豳風「七月」では「八月剝棗、十月穫稻。爲此春酒、以介眉壽」とあり、稻を收穫し酒を醸造して老人に獻ずる旨を説いている。『詩經』が詠う飲酒の場面は、大きく獨酌と對酌に二分されている。前者の用例は必ずしも多くないが、次の二首はその典型と言つてよい。

① 「陟彼崔嵬、我馬虺隤。我姑酌彼金罍、維以不永懷。陟彼高岡、我馬玄黃。我姑酌彼兕觥、維以不永傷。」

(周南「卷耳」)。

② 「耿耿不寐、如有隱憂。微我無酒、以敖以遊。」(邶風「柏舟」)。

登高遠望し故郷の人を想う時、あるいはまた夜半になかなか寝付けない折、その「永懷」「永傷」「隱憂」を打ち拂い、「敖遊」の境地に到らんとして酒を獨り酌むのである。ここには確かに、飲酒陶酔によつて齎らされる忘憂の効果があつたりと提示されている。

これに對して後者の對酌は、近しい少數者でなされるものと特定の集團の多數者でなされるものから構成される。『詩經』に認められる對酌詩の大部分は、賓客諸友や王侯群臣によつて開催される「燕飲」であり、後世になつて頻出する兩人對酌の詩篇は極端に少ない。確認できた作品の當該箇所を四首だけ引用してみる。

③ 「弋言加之、與子宜之。宜言飲酒、與子偕老。」(鄭風「女曰鷄鳴」)。

④ 「儻爾籩豆、飲酒之飫。兄弟既具、和樂且孺。」(小雅「常棣」)。

⑤ 「我有旨酒、嘉賓式燕以敖。……我有旨酒、以燕樂嘉賓之心。」(小雅「鹿鳴」)。

⑥ 「君子有酒、酌言嘗之。……君子有酒、酌言獻之。……君子有酒、酌言酢之。……君子有酒、酌言醕之。」(小雅「瓠葉」)。

③と④はそれぞれ夫婦と兄弟の飲酒場面を敘述し、⑤と⑥は集團による酒宴の様子を描寫している。宴會を詠う多くの詩の中でも、例えば小雅の桑扈之什に收められる「賓

之初筵」では、全五章を通して酒宴の時系列的な進行が詳述され、群臣の豪快な痛飲の様子が活寫されている。亂醉そのものを詩材にした最も早い作品に位置づけられる。参考までに第三章と第四章を掲出してみる。

⑧「賓之初筵、温温其恭。其未醉止、威儀反反。曰既醉止、威儀幡幡。舍其坐、遷、屢舞僊僊。其未醉止、威儀抑抑。曰既醉止、威儀怱怱。是曰既醉、不知其秩。以上第三章」賓既醉止、載號載呶。乱我籩豆、屢舞僊僊。是曰既醉、不知其郵。側弁之俄、屢舞僊僊。既醉而出、竝受其福。醉而不出、是謂伐德。飲酒孔嘉、維其令儀。〔以上第四章〕〔小雅「賓之初筵」〕。

「賦」(直敘)の技法に據つて、無禮講を克明に述べたもの。傍點部にある醉漢の狂態は、宴飲の場を特徴づけるもう一つの側面であつたと言える。この事柄に關連して本詩の主旨が、終末二句の「飲酒孔嘉、維其令儀」(飲酒の孔嘉きは、惟れ其の令儀なり)にあることは明らかである。

ところでこうした『詩經』における飲酒場面の多さは、當然そこで使用される語彙の豊かさにも反映している。

白居易飲酒詩考(埤田)

酒・醴・漿・春酒・旨酒・清酒・朋酒・酒漿・酒食・酒醴……などの名詞、飲・嘗・醉・酌・醜・醕・醕・醜・醜・酒・飲饒・爲酒・燕飲……などの動詞が容易に見出せる。『詩經』で展開される素朴な飲酒の詩境は、その後の漢魏六朝時代に到るとさらに洗練され複雑なものになっていく。飲酒に耽溺する文人の系譜としては、三國魏の曹植や竹林の七賢(阮籍・山濤・嵇康・向秀・劉伶・阮咸・王戎)の存在も大きい。この營爲を自己の人生と文學に缺かせない柱に据えたのは、東晉の田園詩人として名高い陶淵明に他ならない。次節では彼の飲酒詩に焦點を絞つて、その特色と傾向についてさらに深く分析してみたいと思う。

(三) 陶淵明の飲酒詩

陶淵明は東晉から劉宋へと王朝が交替する時代を生きた知識人である。苛烈な權力鬭争の場から距離を置き、故郷の江州柴桑に戻つて「躬耕」「固窮」「守拙」の生涯を送つた文學者として知られる。中國文學における陶淵明の特異性は、士大夫の身分でありながら自ら農耕に従事し、そこから従前には無い田園詩の世界を創成した事實にある。そしてこの田園文學にあつて、飲酒という行爲は極めて大き

な作用を及ぼしたのである。

彼と酒との深い因縁は、先ず自傳とも言うべき「五柳先生傳」(清代陶澍『靖節先生集』卷六)に、「性嗜酒、家貧不能常得。新舊知其如此、或置酒而招之。造飲輒盡、期在必醉。既醉而退、曾不吝情去留。……贊曰、……酣觴賦詩、以樂其志」とあることから明白である。加えて生前の陶淵明と親しく交際した顔延之になる「陶徵士誄并序」(「文選」卷五十七所收)が、「……性樂酒德、簡棄煩促、就成省曠。……晨烟暮靄、春煦秋陰、陳書輟卷、置酒絃琴。……念昔宴私、舉觴相誨」と「酒德」に言及していることは、この蓋然性を補強しよう。さらに重要なことは、現存する陶淵明の作品百三十餘篇にあつて、素材ないし題材として酒を詠うものが實に夥しい數に上つてゐるという事實である。飲酒を話題にする全ての詩文を列擧し、併せて収録卷數も記してみる。因みに※印は飲酒を題材にするものを表している。

○「停雲并序」○「時運并序」○「酬丁柴桑」○「答龐參軍」(以上卷二)○「形影神并序」(形贈影・影答形・神釋)○「九日閑居」○「歸園田居五首」(其五)○「遊

斜川并序」○「乞食」○「諸人共游周家墓柏下」○「答龐參軍并序」○「*連雨獨飲」○「移居二首其二」○「和劉柴桑」○「和郭主簿二首」(其一・其二)○「歲暮和張常侍」○「和胡西曹示顧賊曹」(以上卷三)○「癸卯歲始春懷古田舍二首」(其二)○「還舊居」○「己酉歲九月九日」○「庚戌歲九月中於西田穫早稻」○「*飲酒二十首并序」(序・其一・其三・其七・其八・其九・其十三・其十四・其十八・其十九・其二十)○「*止酒」○「*述酒」○「責子」○「蜡日」(以上卷三)○「擬古九首」(其一・其七)○「雜詩十二首」(其二・其四・其八)○「詠貧士」○「詠二疏」○「讀山海經」(其一・其二・其三)○「挽歌詩三首」(其一・其二) (以上卷四)○「歸去來兮辭」(以上卷五)○「晉故征西大將軍長史孟府君傳」○「五柳先生傳」○「扇上畫贊」(六)鄭次都」(以上卷六)○「祭程氏妹文」○「祭從弟敬遠之」○「自祭文」(以上卷七)。

これらの作品を精讀して最初に指摘できることは、陶氏自らが糯米を栽培し地酒を醸造していることである。ここにも田園に生き田園に死せんとするこの文人の處世が如實

に現れている。自給自足の貧窮生活においては、何時でも何處でも自由に酒を手にできる譯ではなく、限定された機会であるが故に、飲酒に對する思い入れや執着がなお強まっているとも言える。そしてこの自ら造つて飲むという生活様式は、淵明に私淑し敬慕し續けた白氏にそのまま直に繼承されている。居易もまた酒造りに造詣が深く、それに精魂を傾けた文人であつた。ただ兩者の著しい違いは、「躬耕」と「固窮」に生きた淵明が、自由氣儘に酒を飲めなかつたのに對し、七十歳で致仕するまで決して官位俸祿を手放さなかつた白居易が、その豊かな經濟基盤を背景にして上等な酒を思う存分に造り味わうことができたことである。二人は官僚として「兼濟」を捨て「獨善」を選んだ人生では共通しているが、現實の生活に向き合う姿勢や考え方は相當に異質であつたと言わざるを得ない。酒造りに觸れる陶詩には次のものがある。

- (1) 「……漉我新熟酒、隻雞招近局。……」(歸園田居五首其五)。
 (2) 「……春秫作美酒、酒熟吾自斟。弱子戲我側、學語未成音。……」(和郭主簿二首其一)。

(3) 「……彭澤去家百里、公田之利、足以爲酒。故便求之。……」(歸去來兮辭并序)。

このようにして陶氏自ら醸した酒は、ほとんど全てが「醪」(三例)「新醪」(二例)「春醪」(三例)「時醪」(一例)「濁酒」(三例)と表現される³。であり、清酒を表す用例は「清醕」「清酌」の僅か二例に留まっている³。しかもそれらの清らかな酒は、入手することが容易でない對象や自身の葬儀における祭壇の供物として描かれている。酒中仙李白が「蘭陵美酒鬱金香、玉碗盛來琥珀光。」(客中作)・『全唐詩』卷一八一)と詠つた透明で輝きに満ちた酒の詩的心象は、陶淵明の文學には全く無縁であつたのである。當該作品を三首だけ紹介してみる。

- (4) 「……靜寄東軒、春醪獨撫。良朋悠邁、搔首延佇。……有酒有酒、閑飲東窗。願言懷人、舟車靡從。……」(停雲并序)⁴。
 (5) 「……茅茨已就治、新疇復應畚。谷風轉淒薄、春醪解飢飮。弱女雖非男、慰情良勝無。……」(和劉柴桑)。
 (6) 「……萬化相尋異、人生豈不勞。從古皆有沒、念之中

心焦。何以稱我情、濁酒且自陶。千載非所知、聊以永今朝。」(「己酉歲九月九日」)。

各詩は懷友・農耕・死生を取り上げているが、ここに見える「春醪」「濁酒」の詩語は、田園詩特有の情趣を最も濃厚に映し出している。そして彼が詠じる酒の多くは、早朝から夕方まで續く農作業を終えてようやく歸宅した後、一日の「飢」えや「劬」かれを暫し癒してくれる獨酌であり、自ら「素心人」(「移居二首其一」・卷二)と呼ぶ純朴な近隣農民との楽しい對酌であったのである。陶淵明の飲酒詩は田園という環境の中で、その獨特な詩境を際立たせている。

(7) 「……日入相與歸、壺漿勞近鄰。長吟掩柴門、聊爲隴畝民。」(「癸卯歲始春懷古田舍二首其二」)。

(8) 「……開春理常業、歲功聊可觀。晨出肆微勤、日入負未還。……四體誠乃疲、庶無異患干。盥濯息簷下、斗酒散襟顏。……」(「庚戌歲九月中於西田種早稻」)。

(9) 「故人賞我趣、挈壺相與至。班荆坐松下、數斟已復醉。父老雜亂言、觴酌失行次。……」(「飲酒二十首并序其十」)。

四)。

このように陶淵明は本當に酒を愛した人と言える。それだけに貧窮によつて好きな酒を満足に飲めない渴望感は想像するに餘りある。この種の満たされない思いの強さは「余閑居、愛重九之名。秋菊盈園、而持醪靡由。……塵爵恥虛罍、寒華徒自榮。」(「九日閑居并序」)「傾壺絕餘瀝、闕竈不見煙。」(「詠貧士七首其二」)「在世無所須、惟酒與長年。」(「讀山海經十三首其五」)「但恨在世時、飲酒不得足」(「挽歌詩三首其一」)「在昔無酒飲、今但湛空觴。」(「同前其二」)の如く、その詩文集の隨處に認められることから、決して一時的のものではなく、生涯を通して付き纏った缺損感であったことがわかる。そしてこの心情は四十一歳で出仕に見切りをつけ、「婦去來兮、田園將蕪、胡不歸」(「婦去來兮辭并序」)と歸田を決意した頃から急速に強まっている。彼をそれ程までに拘泥させた飲酒の魅力とは何か。最後に検討すべきは、酒境を專一に詠う狹義の飲酒詩である。

既に述べたように飲酒を題材にする詩篇は、「連雨獨飲」「飲酒二十首并序」「止酒」「述酒」を指摘することができる。このうち「止酒」は二十句全てに「止」字を配置した

いわゆる「斷酒詩」であるが、本詩の妙味は反復連鎖からなる修辭技法の驅使にあり、かつ「止酒」という詩題や表現とは裏腹に、飲酒に對する強烈な拘泥に根差して詠われている點にある。また「述酒」は詩中に飲酒場面が全く登場しない寓意詩であり、劉裕に扼殺された東晉最後の天子恭帝への哀悼歌ともされる難解な作品である。今この二篇を除外して考える時、「連雨獨飲」と「飲酒二十首并序」は、陶淵明になる飲酒詩の中心部をなしていると考えてよいであろう。先ず「連雨獨飲」の全文を掲出してみる。

(10)「運生會歸盡、終古謂之然。世間有松喬、於今定何間。故老贈余酒、乃言飲得仙。試酌百情遠、重觴忽忘天。天豈去此哉、任眞無所先。雲鶴有奇翼、八表須臾還。自我抱茲獨、僂俛四十年。形骸久已化、心在復何言。」
〔連雨獨飲〕。

説理と抒情の詠出に最も適性の高い五言古體詩である。命は必ず盡きるとの前提から説き起こし、不老長生を會得した古代の仙人（赤松子と王子喬）は、もはや何處にも存在しないと結論づける。そして農村の長老から贈られた酒

を飲むことで、自らが體感したこの世の仙境を具體的に語ってみせる。一杯また一杯と酒を飲み干せば、世俗のあらゆる感情は遠のき、忽焉と天空の存在すら忘れてしまう。そしてそこに初めて自分と世界の障壁が消失した忘我自適の境地が出現する。陶淵明が「任眞」と説く酔境であり仙境である。ここでは時間は限りなく伸長し、空間は何處までも擴大していく。詩句に見える「八表」（宇宙の果て）へと飛翔する「雲鶴」（仙人の乗り物）は、飲酒の效能そのものを比喩し象徴していると言つてもよい。酒が誘う醱酔陶酔は、一時的であれ時間空間の限界や人間社會の桎梏を融解させるからである。飲酒の場において陶淵明が最も大切にしたこととは、一旦飲むからには必ず酔いを盡くすという一點にあった。「五柳先生傳」が「期在必醉」と述べる理由もまさにここにある。そしてこの条件下では、醜の旨さ（じゅうのあじ）をしみじみと味わうという要素は相對的に後退している。陶氏の數多い飲酒表現の中で酒の旨みを描くのが、「我有旨酒、與汝樂之」（答龐參軍并序）「悠悠迷所留、酒中有深味」（飲酒二十首并序其十四）の二例に過ぎないことは、こうした指摘の根據になり得ると思われる。このこともまた、酒の味を殊の外重視する白居易と大きな違いを示して

いる。

次に取り上げる「飲酒二十首并序」は長大な連作詩であるが、作者自身の序文はその成立事情について次の様に記している。

余閑居寡歡、兼比夜已長。偶有名酒、無夕不飲。顧影獨盡、忽焉復醉。既醉之後、輒題數句自娛。紙墨遂多、辭無詮次。聊命故人書之、以爲歡笑爾。

偶然に名酒を得たことを契機にして、秋の夜長に自らの影法師を相手に獨酌酣醉したことを詠う。「既醉之後、輒題數句自娛」の言葉から、淵明にとって飲酒が作詩の契機となっていることに注意したい。陶酔のなかにも正確な作詩の技法が働いており、酩酊のうちにも覺醒の感覺がある。中國の優れた飲酒詩の系譜に等しく見出せる要素と云えよう。

「飲酒二十首并序」は恐らく一度に製作したのではなく、一定の時間をかけて編成されたと推察される。その内容も酒を全く登場させない詩篇十首（其二・其四・其五・其六・其十・其十一・其十二・其十五・其十六・其十七）を含んでお

り、實に全體の半分が飲酒中ないし飲酒後に生じたであろう感慨や思索となっている。そしてそこでは歴代の知識人（伯夷・叔齊・榮啓期・夏黃公・綺里季・顏回・張良公・楊仲理・劉孟公）の生き方が個々に檢證されており、ここにも作者の覺めた眼差しを窺うことができる。飲酒詩は單に酩酊を詠う文學ではない。むしろ酒を飲むことを端緒にして、そこから深い思索を紡ぎ出す題材詩であつたとも言える。飲酒に直接言及する残り十首の中から、注目すべき作品として「其七」を掲示してみたい。「結廬在人境、而無車馬喧」で始まる「其五」と竝ぶ名作である。

(11) 「秋菊有佳色、裛露掇英。汎此忘憂物、遠我遺世情。一觴雖獨進、杯盡壺自傾。日入羣動息、歸鳥趨林鳴。嘯傲東軒下、聊復得此生。」（飲酒二十首并序其七）。

醉と吟を一體化させて、今この瞬間を生きている實感を確認し吐露したものの。陰曆九月九日の重陽節に芳しい菊の花弁を摘み取り、それを酒杯に浮かべて飲むと、憂愁も俗念も遙かに遠く退いて満ち足りた心地になる。第六句「杯盡壺自傾」の表現が秀逸である。彼はしばしば酒を「忘憂

物」(「飲酒二十首其七」)「杯中物」(「責子」)と呼び、その意義を「忘彼千載憂」(「遊斜川并序」)「酒能祛百慮」(「九日閑居」)と説いている。この詩人にとって「千載憂」(永遠に解消できない畏怖)がもし「生者必滅」を意味しているとするならば、人間を強く縛り付け固く閉じ込めているものから解放してくれる酔境仙境は、それが刹那な非日常であるが故に、なおさら掛け替えないものとして實感されたのである。陶淵明にとっての飲酒は氣が置けない人々との社交の具であるばかりでなく、辛く苦しい現實社會において死生を超越する場として存在している。そしてそれこそは、白居易が飲酒なる營爲の中で追究し續けた喫緊の課題であったのである。第四節ではとりわけ陶白の共通點と相違點に留意しながら、白居易の作品を集中的に検討してみたい。

〔四〕 白居易の飲酒詩

陶淵明と白居易は酒を愛した人であるが、同時にその弊害についても認識していた。擬人法と三副對を併用した淵明の「形影神并序」神釋(卷二)には、「日醉或能忘、將非促齡具」とあり、酒が壽命を縮める可能性を述べてい

る。同じく居易も「對酒自勉」(132)で、「肺傷雖怕酒、心健尚誇詩」と説き、酒が呼吸器に悪影響を與えると明言している。それでもなお陶白の二人は、これらの負的側面を凌駕するものとして酒の效用を語り、なおかつその酒境を己が文學に不可欠な要素としている。陶淵明の殘存作品數が百三十首程度であるのに對して、白居易のそれが三八四〇首に及ぶことは、彼が質量ともに中國飲酒詩の巨峰を形成していることを意味している。

白居易自ら「銷愁物」「忘憂物」「銷憂藥」「賢聖物」「神聖杯」「綠蟻盃」「盃(中・裏)物」「盃中淥」「盃中神聖物」「銷憂治悶藥」……と呼ぶ酒は、その別集である『白氏文集』に遍在している。詩題に酒・醉・飲・宴……を含むものや詩句で飲酒を話題にする全ての作品を抽出し、それらを彼の傳記に即して時系列に並べ直すと、興味深い特色と傾向を確認することができる。飲酒詩の總計は二六八首を數え、七十五年の生涯における最も早いのは、「華陽觀桃花時、招李六拾遺飲」(0623)(三十四歳)三十五歳・長安・校書郎)であり、逆に最も晩いのは「胡吉鄭盧張等六賢、皆多年壽、予亦次焉。偶於弊居合成尚齒之會、七老相顧、既醉甚歡。靜而思之、此會稀有。因成七言六韻以紀之、傳好

事者」(364)(七十四歳・洛陽・刑部尚書致仕)となっている。白氏飲酒詩は看花・交友で始まり、宴樂・死生で終わるのである。人と人の心理的隔たりを瞬時に解消する酒の力は、居易の長い官僚生活で大きな支えになったと考えられる。白居易は獨酌以上に對酌が好きであり、官界の知人友人に飲酒を誘う詩を數多く遺している。長安や洛陽の大都市に住む彼が親しく交際する士大夫は、牛僧孺・裴度・令狐楚・李紳・元稹・李建・劉禹錫……という宰相經驗者を含む錚々たる政府高官であったのである。そしてその究極が、洛陽履道里邸で開催された七十歳以上の老人による尚齒會^{シヤウシヤウ}であったことは誠に象徴的である。功を遂げ名を成し壽を得た儒家的至福が、ここには確かに發現している。尚齒會^{シヤウシヤウ}を詠う最後の二句が「除却三山五天竺、人間此會更應無」と斷ずる所以である。

また飲酒詩全體を年代別に再編成してみると、三十代(十一首)四十代(四十一首)五十代(九十首)六十代(二〇三首)七十代(二十三首)となっており、飲酒の習慣が一生を通じて保持され、この題材詩の多作期が五十歳以降の後半生にあつたことがわかる。また妓女同席の酒宴を描寫する詩篇の多くが、杭州および蘇州の刺史外任期と洛陽の吏

隱退居期に集中していることも留意されてよい。居易が所有した家妓である桃葉(陳結之)や春草(樊素)らが飲酒詩にしばしば詠出されるのもこの時期である。

概して彼の酒は、杜甫のように身心を傷つけ損なうもの――「艱難苦恨繁霜鬢、潦倒新停濁酒杯」(「登高」・「全唐詩」卷二二七)――であるよりは、その生活に喜びと潤いを與えるものであつたように觀察される。魏晉の劉伶「酒德頌」(「文選」卷四十七)に準えた「酒功贊并序」(2938)の創作は、この點を明瞭に表している。しかしそれでもなお、丁母憂の下邳や貶謫先の江州で作られた飲酒詩には、鬱屈した感情が色濃く投影されている。そして題材としての作風と人生の遍歴とは、複雑な明暗を伴いながら分かち難く繋がっている。

こうした飲酒詩二六八首を通讀して確認される第一の特徴は、この詩人が終生敬愛した陶淵明に見倣つて、自ら酒の醸造に深く關與している事實である。その萌芽は早くも、母親陳氏の服喪のために涓村下邳に退居していた元和八年(八一三)四十二歳作「效陶潛體十六首并序」(0212)の序文「……會家醞新熟、雨中獨飲」同じく其六「頼逢家醞熟、不覺過朝昏」にも認められるが、本格的かつ大

規模に酒造りが行われるようになるのは、長安新昌里宅（五十八歳以降）と洛陽履道里邸（六十二歳以降）に於いてであったと考えてよい。例えば次の二首はその典型である。

①「獨醒從古笑靈均、長醉如今敬伯倫。舊法依係傳自

杜、新方要妙得於陳。井泉王相資重九、麴蘖精靈用上寅。釀糯豈勞吹范黍、撇筭何假漉陶巾。常嫌竹葉猶凡濁、始覺榴花不正眞。甕揭聞時香酷烈、餅封貯後味甘辛。捧疑明水從空化、飲似陽和滿腹春。色洞玉壺無表裏、光搖金盞有精神。能銷忙事成閑事、轉得憂人作樂人。應是世間賢聖物、與君還往擬終身。」〔詠家醞十韻〕

〔2673〕・大和三年・五十八歳・長安・刑部侍郎。

②「野鶴一辭籠、虛舟長任風。送愁還閑處、移老人閑中。

身更求何事、天將富此翁。此翁何處富、酒庫不會空。」

〔自題酒庫〕〔3354〕・開成三年・六十七歳・洛陽・太子少傅分司。

①は二十句十韻の七言排律であり、精緻な對句の中で酒を仕込む経緯を詳述し、他の銘酒を凌ぐ自家製のこの酒を飲めば、「能銷忙事成閑事、轉得憂人作樂人」と豪語する。

そして②は洛陽履道里に構えた三千坪近い邸宅^⑤にある酒倉に題識（誌）した五言律詩であり、その終末「此翁何處富、酒庫不會空」は、居易晩年の飲酒環境がどのようなものであったかを教えている。我が家の酒庫は空になることが全く無いと自慢するからである。かつて「君不聞靖節先生樽長空」〔春寒〕（3013）と詠んだ先師陶淵明とは、全く對極の生き方を選択し實踐したのである。この意味で白居易は生活の天才であり、人生の達人であったと評してよいであろう。身は官吏でありながら心は隱者であるという吏隱中隱の處世は、その人生と文學に計り知れない成果を齎している。

居易と飲酒の關係で第二に指摘すべき特色は、酒が透明感のある光り輝く對象（*brilliant*）として敘述されていることである。ある種の陰翳を帯びた光輝なるものへの志向や憧憬は、酒本體に留まらず、關連する酒器や身近の樂器にまで及んでいる。中國文學史で酒を描く詩人は數多いが、それを光で捉える作家は極端に少ない。盛唐の李白と中唐の白居易はその例外的存在である。検出できた詩句を列舉してみる。

○「開瓶瀉鑪中、玉液黃金卮」〔0216〕○「清光入盃杓」〔0218〕○「燒酒初開琥珀香」〔1172〕○「換取金樽白玉卮」〔2631〕○「色洞玉壺無表裏、光搖金盞有精神」〔2673〕○「十分滿盞黃金液」〔2790〕○「產靈者何、清醕一酌」〔2938〕○「家醞一壺白玉液、野花數把黃金英」〔2968〕○「左擲白玉卮、右拂黃金徽」〔2985〕○「角樽白螺盞、玉軫黃金徽」〔3010〕○「金盃翻汗麒麟袍」〔3087〕○「樽裏看無色、盃中動有光」〔3110〕○「琥珀讓晶光」〔3191〕○「若無清酒兩三甕、爭向白鬚千萬莖」〔3295〕○「酒試銀觥表分深」〔3447〕○「絃吟玉柱品、酒透金盃熱」〔3518〕……。

杭州刺史として赴任していた長慶四年五十三歳の折、親友の崔玄亮から贈られた湖州特産の美酒を詠う次の詩篇は、一首全體に互つて眩いばかりの光が横溢しており、彼の飲酒詩の特徴をよく表している。

③「一榼扶頭酒、泓澄瀉玉壺。十分蘸甲酌、激灑滿銀盃。捧出光華動、嘗看氣味殊。手中稀琥珀、舌上冷醍醐。瓶裏有時盡、江邊無處沽。不知崔太守、更有寄來無。」

〔早飲湖州酒、寄崔使君〕〔2338〕。

詩的心象の展開という意味で、酒が放つ光は現實の世界から離脱し、遙かなる時空への飛翔を感覺的に可能にするものであった。それは輝きに溢れた清澄な飲酒の詩境と言つてもよい。

心象分析の第三に言及したいのは、白詩から酒の色・味・香りについての具體的描寫が多く見出せることである。酔態や酔心地を説く詩篇は一般に廣く認められるが、そこからさらに發展して、視覺・味覺・嗅覺・觸覺で酒の屬性を備に解説するのは、白居易の飲酒詩を特徴づける基本的性格である。身體の有り様や感覺に過敏なこの作家の特性は、飲酒描寫の分野においても傑出している。

先の「黃金」「白玉」「琥珀」「琥珀」は光り輝く酒の心象を表現して重要であるが、視覺においては、綠色を中心にして「綠蟻―紅泥」「綠蟻―青娥」「綠醕―黃紙」「黃花―綠樽」「紅蠟―綠油」「綠醕酒―紫河車」「盈樽綠―上面紅」「盃中綠―面上紅」……の如く印象深い鮮明な色對が精力的に試行されている。そして味覺に關しても、「醞酎」「醕濃」「柔旨」「味彌淳」「味甘辛」「氣味殊」「有餘滋」「如錫氣味」「醞酎慙氣味」……などを擧げることができる。さらにまた酒を香りや匂いといった嗅覺で捉えるものに、

「黍香」「酒醺」「香醕」「香麴」「酒氣熏」「一甕香醪」「家醞香濃」「先覺甕頭香」「盃香醪釀新」「氤氳臘酒香」「甕揭開時香酷烈」……などが認められるのは注目に値する。加えて「緑錫粘盞杓」「舌上冷醍醐」「如錫氣味綠粘臺」のように、微妙な觸感——皮膚感覺——を描く詩句が少數ながら存在することも見逃せないであろう。結論から言えば、白居易以外でこれほどまでに酒に付屬する性格を全体的かつ微細に表現する詩人はほとんど指摘できない。彼にとって酒は、單なる嗜好の枠を超えて、生きてある全ての感覺に作用する近い存在でもあったのである。

第四に取り上げてみたいのは、白居易獨特の飲酒法である。彼は「會須一飲三百杯」(將進酒)・「全唐詩」卷一六二「一日須三百杯」(襄陽歌)・「全唐詩」卷一六六「一斗合自然」(月下獨酌四首其二)・「全唐詩」卷一八二「美酒三百杯」(同前四首其四)・「全唐詩」卷一八二と詠った李白とは大きく異なり、自分で定めた適度な酒量を、時間をかけてじっくり味わい盡くす人であったようである。執友元稹に差し出した「勸酒寄元九」(0416)には「一盃驅世慮、兩盃反天和。三盃即酩酊、或笑任狂歌。陶陶復兀兀、吾孰知其他。」とあり、また「效陶潛體詩十六首其四其五」(0216、0217)に

は「……一酌發好容、再酌開愁眉。連延四五酌、酣暢入四肢。忽然遺物我、誰復分是非。……」「一盃復兩盃、多不過三四。便得心中適、盡忘身外事。更復強一盃、陶然遺萬累。一飲一石者、徒以多爲貴。及其酩酊時、與我亦無異。笑謝多飲者、酒錢徒自費。」とある。ここには徐々に酔いを深めながら、一杯ごとに變化する醉心地——身心の快適——を確かめ愉しみ、酔境を自在に逍遙する姿が見て取れる。注いだ杯の酒を一氣に飲み干すのではなく、一杯の酒を三口でゆっくり飲み下す——「一杯置掌上、三嚙入腹内」——所作には、醉人白居易の生の姿が映し出されていて貴重である。

「愛酒(翁・人)」「醉吟先生」と自ら稱し、「一生耽酒客」「異世陶元亮、前生劉伯倫」とまで言い切る白居易にとって、飲酒の在り方は様々な創意と工夫に満ちている。酒を温めたり冷やしたりすることは、彼の飲酒習慣でごく普通に行われた。用例は相當數に及ぶので、當該詩の一部を引いてみる。

④「……林間煖酒燒紅葉、石上題詩掃綠苔。……」(送王十八歸山、寄題仙遊寺)(0715)。

⑤「……爐温先煖酒、手冷未梳頭。……」〔初冬早起寄夢得〕(310)。

⑥「……一盞寒燈雲外夜、數盃温酒雪中春。……」〔和中丞與李給事山居雪夜同宿小酌〕(351)。

⑦「……春酒冷嘗三數盞、曉琴閑弄十餘聲。……」〔七言十二句、贈駕部吳郎中七兄〕(280)。

⑧「……凍花開未得、冷酒酌難醒。……」〔何處春先到〕(278)。

⑨「……蓮子數盃嘗冷酒、柘枝一曲試春衫。……」〔三月三日〕(325)。

これら以外にも薬用酒を詠う「藥銚夜傾殘酒煖」〔村居寄張殷衡〕(078)、「寒傾藥酒螺」〔酬夢得見喜疾瘳〕(342)などがあり、飲酒詩の裾野の廣さが實感される。これに關連して白居易の詠病詩にしばしば酒が登場することも注意されてよいであろう。「病中逢秋、招客夜酌」(036)「病暇中龐少尹攜魚酒相過」(264)「病中贈南鄰覓酒」(327)「夢得臥病攜酒相尋、先以此寄」(338)などからは、軽い病であれば酒は「百藥之長」〔嘉會之好〕〔漢書〕卷二十四食貨志下)たり得るとのほとんど信仰にも近い確信が窺われる。彼に

とつて酒が養生・遣興・交誼の役割を果たしていたことに疑問の餘地はない。それだけに開成四年六十八歳の冬十月に突然襲つた風痺(重度循環器障害)の發作は、まさに宿業の疾病であつたと言わねばならない。極論すれば先天的な弱質多病を強く自覺するが故に、敢えて體力増進のための酒が必要であつたと考えられなくもない。そのように理解しなければ、例えば次の詠病詩かつ飲酒詩が作られた理由も説明できないであろう。彼は身心を活性化させるために、病を押して病中病後にまで酒を飲んでゐる。

⑩「不見詩酒客、臥來半月餘。合和新藥草、尋檢舊方書。

晚霽烟景度、早涼窻戶虛。雪坐衰鬢久、秋入病心初。臥簾蕪竹冷、風襟叩葛疎。夜來身校健、小飲復何如。」

〔病中逢秋、招客夜酌〕(036)。

⑪「頭痛牙疼三日臥、妻看煎藥婢來扶。今朝似校抬頭語、先問南鄰有酒無。」〔病中贈南鄰覓酒〕(327)。

⑫「伍屏軟褥臥藤牀、昇向前軒就日陽。一足任他爲外物、三盃自要沃中腸。頭風若見詩應愈、齒折仍誇笑不妨。細酌徐吟猶得在、舊遊未必便相忘。」〔病中詩十五首并序其十三、就煖偶酌、戲諸詩酒舊侶〕(342)。

酒の飲み方の斬新さという観点から言えば、居易が愛好した卯酒を第一に挙げなければならない。これは起床直後の早朝六時（卯の刻）に、空腹の状態を維持したまま酒を飲むことを指している。何よりも酔いの速効性を求める飲酒法であり、詩中で卯酒を詠うものは合計十一首に及んでいる。詩題および詩句とそれらの製作年齢を記してみる。因みに*印は卯酒を題材にする作品を指し示す。

○「薔薇正開、春酒初熟、因招劉十九・張大夫・崔二十四同飲」〔1055〕（心期同醉卯時盃）〔四十七歳〕○「與諸客空腹飲」〔1347〕（酒聖卯時歡）〔五十一歳〕○「*卯時酒」〔2223〕（未如卯時酒、神速功力倍）〔五十五歳〕○「和微之詩二十三首并序其二十二和嘗新酒」〔271〕（偶成卯時醉）〔五十七歳〕〔五十八歳〕○「嘗黃醕新耐憶微之」〔2816〕（愛向卯時謀洽樂）〔五十八歳〕○「*橋亭卯飲」〔2842〕（卯時偶飲齋時臥）〔五十九歳〕○「早飲醉中、除河南尹勅到」〔2872〕（温爐卯後煖寒時、綠醕新耐嘗初醉）〔五十九歳〕○「府西池北、新葺水齋、即事招賓、偶題十六韻」〔2879〕（卯酒善銷愁）〔六十歳〕○「醉吟」〔2895〕（心頭卯酒未消時）〔六十一歳〕○「*藍田劉明府攜耐相過、與皇甫郎中卯

時同飲、醉後贈之」〔3107〕（卯時十分空腹盃）〔六十二歳〕○「*卯飲」〔3568〕（卯飲一盃眠一覺）〔七十歳〕。

朝酒を嗜むことは下邳に退居していた四十代前半から始まっているが、卯酒の本格的な実践は四十七歳からであり、これは七十歳にまで續いている。江州・杭州・蘇州・長安・洛陽に勤務していた時期と重なり、主に後半生における重要な飲酒法の一つであったことがわかる。卯酒の具體的な效能については、蘇州刺史在任中に作られた次の詩が最も詳しい。五言三十四句からなる古體詩の前半部分を掲出してみる。

⑬「佛法讚醍醐、仙方誇沈瀼。未如卯時酒、神速功力倍。一杯置掌上、三嚙入腹内。煦若春貫腸、暄如日炙背。豈獨支體暢、仍加志氣大。當時遺形骸、竟日忘冠帶。似遊華胥國、疑反混元代。一性既完全、萬機皆破碎。……」〔卯時酒〕〔2223〕。

卯酒が五臟六腑に沁み渡ると、まるで太陽に照らされたように全身が温まり、體と心が寛いで伸びやかになる。そ

して終には主客や自他の區別も消失し忘却した渾然一體の理想郷が出現する。これは人生の有限性を感覺的に克服しようとする酔境であり、白居易が何よりも重視した飲酒の效用であったと言える。身體と精神の解放の境地を素早く保證する卯酒の世界は、例えば洛陽の白邸で創作された以下の作品にも明確に認められる。大和四年五十九歳、太子賓客分司時の七言律詩であり、晩年の閑適詩の作風を最もよく傳えている。

⑭「卯時偶飲齋時臥、林下高橋橋上亭。松影過窻眠始覺、竹風吹面醉初醒。就荷葉上苞魚鮓、當石渠中浸酒餅。生計悠悠身兀兀、甘從妻喚作劉伶。」〔橋亭卯飲〕

〔2842〕。

寢起きに朝酒を酌んでまた一眠り。心地よい眠りから目覺め、卯酒の酔いがすっかり醒めてしまうと、今度は蓮の葉で包んだ「魚鮓」を肴にして、自宅を貫流する「石」の水「渠」で冷やした酒をもう一度飲み直す。白居易の飲酒は睡眠とも深く通底しており、それらが食事風景とも合わさって、身心を包み込むような多幸福感を表徴している。こ

こには確かに、今この瞬間を生きっていると實感できる幸福な時空が描き出されている。精神性を帯びた松と竹の紋景も、飲酒の詩境にある種の奥行きを與えることに成功している。

白詩に現れる飲酒の描寫について、第五に検討しなければならぬのは茶酒の詩境である。白居易の喫茶詩六十二首は、茶を全體的な主題として詠うもの八首、部分的な素材として扱うもの五十四首に大別される。そしてこの中で茶と酒を同時に描くのは、半數以上の三十四首に達している。詩人と詩材の關係から考えた場合、最も重要な考察對象は兩者を併用する作品群である。茶と酒の關係がわかりやすい詩篇を二首紹介してみる。

⑮「松下軒廊竹下房、暖簷晴日滿繩牀。淨名居士經三卷、榮啓先生琴一張。老去齒衰嫌橘醋、病來肺渴覺茶香。有時閑酌無人伴、獨自騰騰入醉郷。」〔東院〕〔1332〕。

⑯「爛漫朝眠後、頻伸晚起時。煖爐生火早、寒鏡裹頭遲。融雪煎香茗、調蘇煮乳糜。慵饒還自晒、快活亦誰知。酒性温無毒、琴聲淡不悲。榮公三樂外、仍弄小男兒。」

〔晚起〕〔2864〕。

「東院」と「晩起」に共通する詩材の配列は、睡眠↓起床↓喫茶↓食事↓飲酒↓彈琴↓酣醉↓睡眠の如く、連鎖する圓環で捉えられており、その靜穩な時間の流れの中に、茶と酒が意圖的に嵌め込まれている。つまり詩人を取り巻く時空が、睡眠を介在させて「日常から非日常」「非日常から日常」へと移動し變容する時、場面轉換を促す茶酒が必須の具として登場し、白居易が別の次元へと飛翔ないし回歸することを保證するのである。この境界にある身心にとって茶の覺醒作用 (kaffein) と酒の酩酊作用 (alcohol) は、絶大な威力を發揮している。それらは「覺醒と酩酊」「沈靜と昂揚」「日常と非日常」という具合に、方向性を全く異にする詩的心象が付與されている。起床後に喉の渴きを癒し、現實の日常に回歸するための茶、陶然たる醉郷へと飛翔させ、身心を心地よい眠りの世界に誘導する酒、そのどちらもが、彼の閑適詩を成立させる重要な構成要素であったのである。酒をこよなく愛する居易が、喫茶文化の開花する中唐の時代に生まれ合わせたことは大きな意味を持つ。久しい傳統を繼承する飲酒詩と未開拓の新しい主題である喫茶詩。白氏は好對照なこの二つの題材詩を、ほぼ同時に手に入れた最初の詩人であったと判斷されよう。

第六として最後に考察すべきは、白居易の飲酒連作詩の意義である。合計六十四首に上るこの作品群は「效陶潛體詩十六首并序」(0216～0226)(下邳・四十二歲)「醉吟二首」(1064～1065)(江州・四十七歲)「花下對酒二首」(0543～0544)(忠州・四十九歲)「戲和賈常州醉中二絕句」(2448～2449)(蘇州・五十四歲)「江上對酒二首」(2499～2500)(蘇州・五十五歲)「對酒五首」(2676～2680)(長安・五十八歲)「勸酒十四首并序」(2736～2769)(洛陽・五十九歲)「府酒五絶」(2896～2900)(洛陽・六十一歲)「七年元日對酒五首」(3055～3059)(洛陽・六十二歲)「把酒思閑事二首」(3090～3091)(洛陽・六十二歲)「嘗新酒、憶晦叔二首」(3110～3111)(洛陽・六十三歲)「冬初酒熟二首」(3195～3196)(洛陽・六十三歲)「宅西有流水、壻下搆小樓、臨翫之時、頗有幽趣。因命歌酒、聊以自娛。獨醉獨吟、偶題五絶」(3318～3322)(洛陽・六十六歲)から構成される。このうち「勸酒十四首并序」の大作は、「何處難忘酒七首」と「不如來飲酒七首」の二部からなり、同一表現の連続によって人生や社會における酒の不可缺性について、個々の境遇や立場を通じて説く。同じく「對酒五首」では「空間と時間」「衰老と死生」「瞬間と永遠」「俗界と醉境」などを相互に論じつつ、飲酒酣醉への傾倒を自己解說的に述べ

る。何れも個性的な作品であるが、ここでは一般に流布する「對酒五首其二」を引用してみる。居易が得意とした七言絶句の佳作であり、『莊子』雜篇の則陽篇と盜跖篇の典故を踏まえ、身體表現を伴った對偶比定の詩想が開陳される。總じて人間は空間と時間の桎梏から逃れ得ない存在であるが、酒の攝取によって齎される酔境は、そうした自由な現實の日常から脱却して、非日常の世界に没入することを可能にしてくれる。「一杯一杯復一杯」(李白「山中與幽人對酌」・『全唐詩』卷一八二)と飲み進めるうちに、自分を取り巻く人や物との一體感はより強まり、ここでは眞に生きることの意味が改められるのである。飲酒詩人白居易への高い評價は、陶酔の中で人生の有限性を感覺的に克服せんとする詩情や詩想を前提にして成立している。

⑰ 「蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身。隨富隨貧且歡樂、不開口笑是癡人。」(對酒五首其二)(2677)。

ところで陶淵明との比較という意味では、連作詩の中でも「效陶潛體詩十六首并序」が特記されねばならない。白居易夫妻の手厚い介護を受けていた母陳氏は、元和六年四

月三日に長安宣平里の私第で逝去する。享年五十七。すぐに京兆府戸曹參軍と翰林學士を辭し、ここに下邳義津鄉金氏村での三年以上に及ぶ服喪が始まるのである。白氏墳墓の地への蟄居は、結果として陶淵明の人生をも強く想起させるものとなった。政治權力からの離脱、士人社會との隔絶、母と娘との死別離、小さな農村での生活、質朴な村民との交流、耕作への關與などの環境のもと、居易は濁酒の釀造を開始し、朝酒の效用を自覺し、死生に向き合い、その成果として陶淵明「飲酒二十首并序」を模倣した連作十六首^⑱を完成させている。この十六首には様々な場面と古今の人物が登場するが、一貫した主題は死生と飲酒の關係にあると判斷してよい。何故に酒は人生に不可欠なのか。ここで提起された命題は死の直前まで執拗に追究されていくことになる。分かりやすい作例を二首だけ掲げてみる。

⑱ 「不動者厚地、不息者高天。無窮者日月、長在者山川。松柏與龜鶴、其壽皆千年。嗟嗟群物中、而人獨不然。早出向朝市、暮已歸下泉。形質及壽命、危脆若浮烟。堯舜與周孔、古來稱聖賢。借問今何在、一去亦不還。我無不死藥、萬萬隨化遷。所未定知者、修短遲速間。

幸及身健日、當歌一罇前。何必待人勸、念此自爲歡。」
 (效陶潛體詩十六首并序其一) (023)。

①9「烟雲隔玄甫、風波限瀛洲。我豈不欲往、大海路阻修。
 神仙但聞說、靈藥不可求。長生無得者、舉世知蜉蝣。
 逝者不重迴、存者難久留。踟躕未死間、何苦懷百憂。
 念此忽內熱、生看成白頭。舉盃還獨飲、顧影自獻酬。
 心與口相約、未醉勿言休。今朝不盡醉、知有明朝不。
 不見郭門外、纍纍墳與丘。月明愁殺人、黃蒿風颼颼。
 死者若有知、悔不秉燭遊。」(同前其十一) (023)。

衰老への不安と死滅への畏怖、生と死が紙一重である現實を前にして、それら「百憂」を克服するために、酒の力を借りて今あるこの瞬間を可能な限り充實させようとする。「心」と「口」が約束した言葉「未醉勿言休」は、作者の偽らざる本心であったと思われる。そしてそれが「五柳先生傳」の「期在必醉」を踏まえていることは明らかである。飲酒酣醉によって自分と世界が一體化した如く感じられる「忘我自適」の境地——特に醉から眠へと移り変わる時空——は、「死生一如」を感得する上で大きな力を發揮している。陶淵明の境遇に近似した下邳という辺鄙な

生活環境の中で、白居易は陶詩を支える重要な要素に、飲酒と死生と説理があることを正確に理解していたと推察される。下邳退居以前の飲酒詩九首のほとんど全てが、單なる社交友誼の作品であることを考え合わせると、「效陶潛體詩十六首并序」はこの後に展開していく白居易飲酒詩のいわば原型を形作っていると結論づけられよう。骨肉諸靈が眠る墳墓の地は、彼における飲酒と死生の文學の原點であつたのである。

〔五〕 結語

本稿では陶白の飲酒詩の共通性と異質性に着目しながら、この題材詩特有の性格について考察を加えてきた。中國最古の詩集である『詩經』に始まる飲酒詩の系譜は、東晉の陶淵明の出現によって大きな轉折點を迎え、さらに中唐の白居易の登場を待つて飛躍的な發展を遂げた。『白氏文集』には「對酒」「把酒」「勸酒」「強酒」「沽酒」「嘗酒」「縱酒」「攜酒」の詩題が多く認められ、それらの飲酒詩では酒の造り方や飲み方、さらに酔境に到る身心状況とそこから派生する感慨や思索が大量に詠出されている。この文學の出發點が下邳丁憂時代の「效陶潛體詩十六首并序」に

あることは既に述べたが、そこで詠われた飲酒と死生の詩境は、その後さらに廣さと深さを増して、最終的には陶淵明と異なる独自の酒境を確立したのである。死の四年前七十一歳に詠じた次の作品は、この事實を端的に示している。家族や使用人と暮らす洛陽履道里邸での飲酒場面を描く五言古體詩。ここでは陶淵明が「忘憂物」と呼んだ酒に全く新しい詩的心象が付與されている。

⑱ 「人生七十稀、我年幸過之。遠行將路盡、春夢欲覺時。

家事口不問、世名心不思。老既不足歎、病亦不能治。
 扶持仰婢僕、將養信妻兒。飢飽進退食、寒暄加減衣。
 聲妓放鄭衛、裘馬脫輕肥。百事盡除去、尚餘酒與詩。
 興來吟一篇、吟罷酒一卮、不獨適情性、兼用扶衰羸。
 雲液洒六腑、陽和生四肢。於中我自樂、此外吾不知。
 寄問同老者、捨此將安歸。莫學蓬心叟、胷中分是非。」

〔對酒閑吟、贈同老者〕（354）。

本詩から衰老への不安や死没に對する畏怖の情は微塵も窺えない。快適な身心の描寫と共に恬淡や委命や達觀の詩情が二十八句全體に満ち溢れており、ここには老後の生

きてある幸福を主體的に語る文學が顯現している。そして「處世の理」や「生命の理」を追究する白氏の閑適文學の内に、飲酒詩が吸収され包攝されている。概して感傷に傾きがちな飲酒が閑適の重要な柱に据え置かれていることは、白居易の飲酒詩が持つ獨特の個性を改めて強く主張する根據になるであろう。醉吟先生を自稱する彼は、飲酒なる題材とともに成長し發展する詩人であったのである。

注

(1) 一九四五年以後の日本における白居易飲酒詩の論考については、下定雅弘『白氏文集』における茶と酒の研究二六八頁～三〇七頁（『白居易研究年報』第十七號特集飲酒と喫茶、勉誠出版、二〇一七年十二月）に簡略な紹介がある。併せて参照されたい。

(2) 因みに『楚辭』における飲酒表現は、「九歌」（東皇太一・東君）二例「漁夫」一例「招魂」二例の總計五例であり、『詩經』に比べて壓倒的に少ない。本稿が飲酒詩の始原を『詩經』と定める理由である。また屈原の覺醒した人物形象も併せて注意されよう。

(3) 「……民生鮮長在、矧伊愁苦纏。屢闕清醕至、無以樂當年。……」（『歲暮和張常侍』・卷二）「……故人懷其相悲、同祖行于今夕。羞以嘉蔬、薦以清酌。……」（『自祭文』・卷七）。

- (4) 本詩の序文にも「停雲、思親友也。罇湛新醪、園列初榮。願言不從。歎息彌襟。」とある。
- (5) 洛陽履道里邸の意義についてはかつて詳しく論じたことがある。『白居易研究 閑適の詩想』第八章白居易と家屋表現(十) 洛陽履道里邸および第十章白居易「池上篇」考―水邊の時空と閑適の至境(汲古書院二〇〇六年十月)を参照。
- (6) 「卯時酒」(223) 第五句第六句(寶曆二年、蘇州刺史、五十五歳)。
- (7) 念のために言えば、「齋」と「疾」のために百日間の禁酒を實行したことを詠う作品がある。しかしそれでも病氣快復後すぐに飲酒が意識されている。「園杏紅萼坼、庭蘭紫芽出。不覺春已深、今朝二月一。去冬病瘡痛、將養遵醫術。今春入道場、清淨依僧律。嘗聞聖賢語、所慎齋與疾。遂使愛酒人、停盃一百日。明朝二月二、疾平齋復畢。應須挈一壺、尋花覓韋七。」(二月一日作、贈韋七庶子)(305)。大和九年六十四歳、洛陽、太子賓客分司時の作。
- (8) 「朝飲一盃酒、冥心合元化。兀然無所思、日高尚閑臥。……」(效陶潛體詩十六首其三)(225)。
- (9) 注(5) 所掲書の第八章および第十章を参照。
- (10) 注(5) 所掲書の第九章「白居易における松と竹」を参照。
- (11) この点についての詳細な分析と考察は、『白樂天研究 詩語と修辭』第九章白居易の喫茶詩について―茶酒の詩境(汲古書院、二〇二〇三月)を参照されたい。
- (12) 「恵子聞之而見戴晉人。戴晉人曰、有所謂蝸者、君知之乎。曰、然。有國於蝸之左角者、曰觸氏。有國於蝸之右角者、曰蠻氏。時相與爭地而戰。伏尸數萬。逐北、旬有五日而後反。君曰、噫、其虛言與。……」(『莊子』雜篇、則陽篇第二十五)「……人上壽百歳、中壽八十、下壽六十。除病瘦死喪憂患、其中開口而笑者、一月之中、不過四五日而已矣。……」(『莊子』雜篇、盜跖篇第二十九)。
- (13) 白居易文學における「效陶潛體詩十六首并序」の意義については、注(11) 所掲書の第十章白居易「效陶潛體詩十六首」の修辭技法で詳しく論じた。本稿の主旨とも關係するので、併せて参照されることを希望する。因みにこの連作詩が陶淵明「飲酒二十首并序」の模擬作であることに疑問の餘地はないが、作品總數については「十六首」と「二十首」の如く齟齬が生じている。この點に關連して井上一之「陶淵明集の詩想、説理と表現様式」第七章「飲酒」連作主旨初探一九六頁(研文出版、二〇二三年五月)では、「白居易が見ていた『陶集』には、飲酒十六首に作っていたと考えられる」と述べる。各種版本によって文字の異同が大きい陶淵明詩文の實態に即して考えると、興味深い見解であり留意されよう。

* * *

作者：埋田 重夫

Author : UMEDA Shigeo

標題：白居易飲酒詩考——與陶淵明相比

Title : An Essay on the Drinking Poems of Bai Juyi 白居易: In

Comparison with the Poems of Tao Yuan-ming 陶淵明

摘要：本稿主要從作詩題材出發，對白居易文學之一端試做探討。白居易不管在何時、何地，都有吟詠自己飲酒的習慣。而且通過考察發現，其詠詩技法與作品風格，都隨着年齡的增長而變化。從結論而言，對白居易飲酒詩的考察和分析，已經超越了單純的題材論、養生論等範疇，可以認為是觸及其文學特質（帶有白居易個性）的有效方法之一。通過解讀、分析具體的作品，本稿對該題材詩所具有的各種可能性作了進一步闡釋。

關鍵詞：白居易 陶淵明 飲酒詩 題材 系譜